

コレージュ・ド・フランスにおける 人文主義の精神と講義の魅力

The spirit of the humanism and the attraction of the lecture in Collège de France

平光 哲朗

Tetsuro HIRAMITSU

(要旨)

フランスにおける特権的な高等教育機関であるコレージュ・ド・フランスについて、まずその伝統がいかに関形成されてきたかを歴史的に辿る。それにより、人文主義の精神がその伝統として保持されてきたことを、19世紀におけるミシュレの講義、20世紀におけるヴァレリーやフォーコの教授就任とその講義に見出す。次いで20世紀初頭におけるベルクソンの講義をその内側から眺めることで、その講義が一般市民である聴講者たちを惹きつけた魅力を明らかにする。それとともに、コレージュ・ド・フランスの伝統が、新たな問題に取り組みつつ講義を行う学者たちの生きた言葉によって保持され、形成されてきたことを明らかにする。

キーワード：コレージュ・ド・フランス、人文主義、ベルクソン、講義、生きた言葉

はじめに

本稿は、フランスにおける特権的な高等教育機関であるコレッジ・ド・フランスについて、まず、その伝統がいかに形成されてきたかを歴史的に辿り明らかにする。次いで、20世紀初頭における同コレッジでのベルクソンの講義に注目し、その講義が聴講者を惹きつけた魅力を明らかにしようとする。それにより、コレッジ・ド・フランスの伝統が、絶えず新たに賦活されることで保持されてきたことを明らかにしたい¹。

コレッジ・ド・フランスは、フランス高等教育のなかで特別な地位を占める。それは、法的には大学と関係なく、文部大臣が直轄する独立した機関である。創設以来500年近くに及ぶ歴史を持つこの機関は、一貫して学問の進歩に貢献することを使命とし、政治的動乱を乗り越えて高等教育の理念を保持し続けてきた。コレッジ・ド・フランスは、所属学生を持たず、聴講者を持つのみであり、学位や免状を授与することはない。教員には自由な探求が保障され、講義は万人に開かれている。教授には、あらゆる分野の最も卓越した人物が選ばれ、教授への就任は学者にとって最高の名誉とされる。そして教授には毎年度独自の研究を新たに発表することが求められる。

簡単に、21世紀の今日におけるコレッジ・ド・フランスでの講義の様子を見ておこう。A. コンパニオンは、M. プルーストの研究等により世界的に知られた文学研究者であり、現在同コレッジ教授である²。彼は、パリ第4大学教授を兼任しているが、研究室はコレッジ・ド・フランスに置かれている。彼は、後でその名を挙げることになるR. バルトの弟子であり、就任講義においてもバルトを取り上げていた。コンパニオンは人気教授である。彼の講義を聴こうとして開始時刻に教室へ行ったとしても、彼が実際に講義する部屋には入れない。その教室は、300人は収容できる階段教室なのだが、すでに満員である。そうした場合、聴講者は他の部屋へ、例えば5番目の部屋へ通され、そこでスクリーン中継される講義を聴くことになる。コンパニオン教授と同じ部屋で講義を聴こうと思うなら、30分か1時間前には教室について席取りをしておく必要がある。聴講者たちには高齢者が多く、有閑マダムも散見される。概して彼らの身なりは上品であり、高級な衣服で着飾っている。彼らはむしろオペラやクラシックのコンサートの客層に近い。講義が万人に開かれているとはいえ、その内容は例えば日本のカルチャーセンターなどで行われている一般向けの易しいものではない。それは大学の講義の水準のものであり、専門的である。また聴講者の知的水準も高い。講義はおよそ2時間行われ、1時間はコンパニオン自身による講義、1時間は、例えば他のプルースト研究者を招き、その話を聴くという仕方で進められる。

1. コレッジ・ド・フランスにおける人文主義の精神

コレッジ・ド・フランスの伝統は何か。それは人文主義の精神である。ここでは、S. デイルセーによる浩瀚な大学史研究『フランスと諸外国の大学の歴史(原題)』³を主に参照し、その伝統がいかに形作られ、現在まで保持されてきたかを紐解いてみたい。

人文主義の精神

コレージュ・ド・フランスの創設は1530年に遡る。16世紀初頭、フランスには人文主義が、主としてイタリアから移入され、浸透していた。しかしパリ大学の、とりわけ神学部ソルボンヌはその台頭を敵視し拒否した。神学部はルターに続きエラスムスを異端と断じ、その著書を告発する。教養部には、文芸復興や古典学問は受け入れられていたが、神学部は職業的伝統と神学者養成に凝り固まっていた。こうしたなか、フランソワ一世が、ギリシア学者であり人文主義者であった国王顧問ギョーム・ビュデらの提案をもとに、ヘブライ語、ギリシア語、数学の教授を6名任命し、「王立講師団」(lecteurs royaux)を発足させる。この講師団任命においてすでに、それ以降保持されることになる伝統がつけられた。それは、人物が学問よりも重視される、ということである。学問は、成ってしまえば固定化し形骸化する。しかしそれを生み出すのは人間であり、その自由な探求である。この理念は、固定化した枠組みを嫌う人文主義の精神の現れであった。

さて、ソルボンヌは王立講師団を潰そうとするが果たせず、講師団はフランス、そしてイタリアから最高の学者を招き、さらにラテン語、哲学、自然諸科学(天文学、地理学、医学)の講座を開いて、1550年にはすでに独立した機関となった。しかし、17世紀に入ると「王立コレージュ」(Collège royal)としてのその活動の水準は低下した。代わって「科学アカデミー」や「アカデミー・フランセーズ」に先進的な学問的精神は結集する。けれども、18世紀のフランス革命を通して、アカデミーは学士院に解体・統合されるが、王立コレージュは「コレージュ・ド・フランス」(Collège de France)と改称され、以後続くナポレオンによる専制、執政政府期、帝政期等の政治的動乱を「奇跡的に」生き抜いた。コレージュ・ド・フランスは、高等教育の理念を堅持する唯一の存在として聳え続けたのである。

19世紀における諸講義

19世紀におけるコレージュ・ド・フランスの諸講義を、同世紀前半におけるロマン主義の台頭と、パリを中心として勃興した自然諸科学の刷新、この二つを中心に窺ってみよう。この時代ロマン主義が、ナショナリズムと自由主義を主たる傾向として文化的世界を覆った。1838年、J. ミシュレがコレージュ・ド・フランスの歴史・道徳担当教授に就任する。彼の講義は、やがて大著『フランス革命史』に結実する主題をまさに論じるものであった。1845年度の講義は「革命の精神とその影響範囲」であり、46年度は「国民性」、そして47年度は「革命について」である⁴。これらの講義を通して、ミシュレは、フランス革命とは何だったのかを徹底的に考察し、フランスの国民性が形成されてゆくその頂点に大革命を見出していったのである。また、19世紀、パリは自然諸科学の中心地となり、とりわけ生物学において世界をリードした。その二つの拠点が「自然史博物館」とコレージュ・ド・フランスであった。後者には、生物学、医学、自然史、そして生理学の各講座が設置された。1855年、医学の教授に就任したのが、すでに世界的な名声を勝ち得ていたクロード・ベルナールである。彼の講義は出版され、例えば「麻酔薬について、並びに仮死についての講義」等が講義録として残されている⁵。この時代、新たな知の自由な探求はこの二つの機関の任務であり、他の大学は主に教育にあたっていた。

20世紀における諸講義

そして、われわれの記憶に新しい20世紀の教授陣には、H. ベルクソン（哲学）、L. フェーブル（歴史学）、C. レヴィ＝ストロース（文化人類学）、J. モノー（数学）、P. ブーレーズ（音楽）、R. バルト（文学）、P. ブルデュー（社会学）らの名が連なる。ここではP. ヴァレリーの教授就任とその講義の動向を、彼の伝記を参照することで垣間見てみよう⁶。1937年、ヴァレリーは教授に立候補し、教授会での選挙を経て就任する。これは言語学・イラン研究の巨人E. バンヴェニストが比較文法講座に着任したのと同年である。ヴァレリーは立候補にあたって、詩学を講義する構想を示していた。コレージュ・ド・フランスにはそれ以前に詩学講座は存在しておらず、彼が教授に選ばれることは、詩学講座が新たに創設されることを意味していた。ヴァレリーは就任記念講義に向け、恐怖と戦い、「圧迫感で窒息しそうに」なりながら準備する。

第一回目の講義は十二月十日におこなわれる。会場に入ろうとして人々が喧嘩をするほどであった。親戚、友人、同僚、社交界のご婦人方、ファン、物見高い人、スノッブ、あらゆる人たちが偉大な人間の話を知りたいと思う。最初の頃、ヴァレリーの講義は、アカデミックな人たちというよりは、むしろ世俗的な、雑多な人々を引きつける。しだいに、彼の話すテーマに直接関心がない人々は消えていく。忠実な聴講者たちを中心とするグループができあがり、…（中略）…そうした若者の数は次第に増えていく⁷。

20世紀後半には、M. フーコーが、彼の教授就任に伴い創設された「思考システムの歴史」講座の担当となる。彼のコレージュ・ド・フランス講義はすでに刊行されており、邦訳も為されている。ここでは、講義録の二人の編者による「緒言」を参照し、彼の講義の様子を窺うとともに、彼の講義が同時代人々に新たな光をもたらしたことを確認しておこう。

ミシェル・フーコーの講義は、一月のはじめから三月末まで、毎週水曜日におこなわれた。出席者は大学生・教職者・研究者・興味本位の人々からなっていた。外国人も数多くいた。出席者が多かったため、コレージュ・ド・フランスの大講堂が二つ使用された⁸。

しかしフーコー自身は、多数の聴講者たちが詰めかけることで生じる「距離」を憂え、また講義形式では彼らと自由に意見を交換することができないことを嘆いていた。後年、フーコーは講義が終わった後も、長時間に渡って聴講者たちの質問に応えるようになる。こうして展開された彼の講義は、聴講者にとって混迷の「現在を照らす光」を放つものであった。

講義にはまた、アクチュアリティにおける機能もあった。フーコーの講義を聞きにくる聴講者は、週を追って組み立てられていく物語の虜になっただけでもないし、説明

の厳密さに誘惑されただけでもない。…（中略）…彼が語っていたのはニーチェやアリストテレスについて、あるいはまた十九世紀の精神鑑定やキリスト教的司牧制についてではあったが、聴講者はそこからつねに、現在を照らす光、同時代の出来事を照らす光を引き出した⁹。

コレージュ・ド・フランスは、人文主義の精神をその変わらぬ伝統として保持し、自由な探求と学問的刷新の殿堂としていまなお存続している。この伝統は、例えばミシュレが、講義においてフランス革命の意味を根本的に問い直すことで、あるいはヴァレリーのような詩人が教授として就任し、詩学講座が創設されることで、そしてフーコーのような人物を、すなわち、人文諸学の知を考古学的に探索し「人間の消滅」を告げた人物を、また知と権力との結託を批判し告発する人物を教授として迎えることによって、絶えることなく形成されてきたものである。

2. コレージュ・ド・フランスにおける講義の魅力

コレージュ・ド・フランスの講義の魅力、見てきたように多様かつ多数の聴講者を惹きつけてきた魅力はどのようなものだろうか。その一端は説明の魅力にあるだろう。私たちが、ある著述家書いていることについて、難解さを感じながらも漠然とした理解を持っている場合、その人の話を直接聴きたいと思うのは、おぼろげな理解を判明にし、その思考を手中に収めさせてくれるような、著述家自身による説明を求めてのことである。このほど邦訳が出版されたH.ベルクソンによる『時間観念の歴史 コレージュ・ド・フランス講義』¹⁰に刻まれているのは、一人の哲学者が自らの学説を説く明らかな言葉であり、「生きた言葉」である¹¹。前節で見たヴァレリーやフーコーの講義と同様に、ベルクソンの講義においても、講堂はソルボンヌの学生たち、僧侶たち、パリの名士たち、そして社交界の女性たちで埋め尽くされていた。しかしベルクソンは、彼らが注意深く聴いていたとしたら、理解可能な仕方ですら自らの思想を説いている。

ここでは、講義録の校訂者C.リキエが述べているこの講義録が持つ「二重の特権」、一方は「(ベルクソンの)思考の理解に新たに特異な光をもたらす」もの、他方は「専門的な研究の輪を越えてより広汎に輝きを放つ」もの(19)、まずはこの後者の輝きの一筋を浮かび上がらせるべく努めよう。それにより、聴講者を惹きつけたコレージュ・ド・フランスの講義の魅力の一端を明らかにしたい。

この1902-1903年度の講義録は19の講義から成り、第5講以下で講義全体の主題である古代ギリシアから近世、近代の様々な哲学体系における時間観念の検討がなされている。その手前で、ベルクソンは主題への導入部として、第1講から第4講にかけて、「時間とは、その本質からして、記号的に表現されえない、純粋な諸概念によって表象のうちに収まりえない何か」(87)であることを説明している。この「何か」、それは彼の哲学の根底を貫く経験、「持続」(durée)である。この講義録のなかにその積極的な表現を求めておこう。持続は、「動くものの内部に身を置くこと」(29)によって、それ自体において知られる「単純で不可分な何か」(58)であり、「一つの運動」(58)である。持続を「私たちの意識状態の

継起」において捉えれば、それは意識の連続性であって、「私たちが、自らを見つめ、意識的な生、内的な生を生きるに任せるとき、自分自身の奥底に見られるもの」である(86)。しかし、私たちは持続をありのままに知ろうとすると「法外な困難」に出会う(50)。ベルクソンはこの困難の由来を、第2講では記号の本性を分析することで、第3講では一般概念の起源を考察することで説明している。とりわけ第3講で、ベルクソンは、概念の一般性の起源を説き起こしながら、概念が非連続的な認識しかもたらさないことを、説得的に展開している。その説明に耳を傾けよう。

概念の一般性の起源

例えば、青という概念はどのように形成されるだろうか。私たちは様々な色合いを持つものの中に、青の多様なニュアンスを見つけていく。そして青という点で類似するものをグループ化し他の色と区別する。そうすることで、このグループに共通する性質として青を抽出し、それを概念化するだろう。こうして私たちは青の概念を手に入れることになる。しかし、と、ベルクソンはここで聴講者に問いかける。

なるほど。しかし、任意のニュアンスを示す諸対象を一緒にグループ化することになったのは、なぜでしょうか。さらに言えば、どうして青を、音や形、動物などではなく、青と比較することができたのでしょうか。私たちが、或る共通性、何か共通なものの観念をすでに持っているものでなければ、…その概念をすでに所有していたものでなければ、どうしてさまざまな項を一緒にグループ化し、それらの項を比較し、共通の性質を抜き出し、一般化するという考えが浮かぶのでしょうか(67)。

つまり、概念が一般的なものとして形成されうるのは、私たちがはじめからすでに、その一般的なものを、類似を持っているからだ、というのである。ベルクソンはこう続ける。グループ化、一般化を可能にする類似については、知覚だけを見ても分からないのであって、それは行動が知覚に持ちこむものである、と。彼は青い花々に寄り集う昆虫を例にとる。

昆虫が青を他の色と区別するのは、…死活的な(vital)必要性という深みにまで根を下ろしている何かです。…この青は、おそらくは、昆虫の知覚に語りかけ、働きかけ、その知覚の仲介によって、種々の運動器官に働きかけます。それゆえに、昆虫は、目標物が知覚されるや否や飛び立つことになるのです。昆虫は、自らを引き付ける青に向かって飛び立つ傾向を有しているのであって、そうだとすれば、この青のうちの一般的な部分についての意識は、その知覚が昆虫を置き入れるほとんど必然的な態度についてその昆虫がもつ意識以外の何物でもありません(70)。

ベルクソンは、概念の一般性の基礎を、生物における行動に見るよう聴講者を導く。彼は、類似は、生物の知覚に与えられた様々な色合いのなかで、特定の色合いに対して、生物が

ほとんど自動的に採る行動の、態度の同一性によってもたらされる、と説くのである。

こうした議論自体は、すでにベルクソンが、この講義に先立つ1896年の『物質と記憶』第3章で論じていたものである¹²。しかし彼はこの講義においてその同じ議論を、この講義を準備する彼の念頭にあった新たな問題、「哲学者の視点から、さまざまな生物学理論に含意された哲学的諸観念の視点から見た生命の諸理論というこの問い」(88)、つまり、この講義から数年後の1907年に出版される『創造的進化』を生み出すことになる生命という問題の観点から、説明し直している。このことは、『物質と記憶』においては、行動が、物質における反作用から生命における行動まで一貫して同じ形式において理解されているのに対し¹³、この講義では、生命の振る舞いとしての行動に考察の軸が移されていること、つまり、『創造的進化』で前景化される有機体と無機物の区別が、行動の理解に及んでいることにも現れている。そして、次に見る概念の非連続性を行動に基づける議論は、『物質と記憶』には見られなかったものである。

概念の非連続性

ベルクソンは、概念による認識が非連続性を本性とすることを説明して、次のように言う。

人間の知覚する温度の度合いを例にとりましょう。私たちは、一定の範囲のあいだで温度のあらゆる度合い…を知覚します。熱いのか冷たいのか。知覚にすぎない知覚にとっては、熱いも冷たいもありません。温度の度合いしかないからです。しかし、…行動にとってはまったく事情が異なります。というのも、ある冬の日¹⁴、私が窓を開ければ、自分が魅惑を感じているのか、嫌悪を感じているのか、外出するためにさらに衣服を身にまとうべきかどうかはきわめてよく分かるからです。…行動ははっきりとした選択によって事を進めます。必要なのはイエスかノーかなのです(71)。

知覚は、それ自体ではあれとこれとを区別する理由を持たない。ただ単に知覚されているだけの世界では、すべては何らかの点で等しく、また異なってもいるだろう。しかし行動はあれかこれかの選択であり、つねにイエスかノーを迫る。ベルクソンは、行動におけるこうした選択が、実在の連続性の中に非連続性を持ち込むのだ、と説明する。つまり、生物が何らかの類似を見て取ることは、知覚における連続性に行動が非連続性を持ち込んでいる、ということである。

純粋な知覚の領域では、一切は一切と類似し、一切は一切と区別され、類似ないし差異の連続性があるのに対し、行動とは、反対に不連続な何かなのです。…知覚になしえないこと、すなわち諸対象を近づけ、そこから概念の基礎を形成することは、行動にはなしうることなのです(76)。

ベルクソンは、生物学的な考察から、概念の一般性の起源を類似に見出し、さらに類似の成立を、行動の非連続性と重ねて説明する。この説明の流れの中にいた聴講者は、おそらく次の言葉に肯き、納得しただろう。「概念による認識は、したがって、非連続的なものであり、そこからして、決して実在の連続性を厳密に表現するには至らないでしょう。それは非連続的な認識なのです」(80)。「概念とは、外側から取られた視点、行動に関わる視点であって、もし実在をありのままに認識しようと望むならば、また別の手法を試してみなければならぬ…」(81)。そしてこの別の手法、それは持続に、「思考したいと望む事物の中に自らを置き入れ直そうと努める」ものである。ここでベルクソンはその手法を「知的共感」ないし「直観」と呼んでいる(81)。「みなさんはこうおっしゃるでしょう。そんなことが可能なのか、と」(81)。彼は答える、可能なのだ、と。

結び 人文主義の精神と生きた言葉

コレージュ・ド・フランスの伝統は、第1節で見たように、その創設以来、人文主義の精神を絶えず新たに選び取ることで形成されてきた。コレージュ・ド・フランスにおける人文主義とは何か。すでに述べたが、ここでもう一度、ディルゼー自身の言葉に耳を傾けよう。

だが、これら初代の教授陣の任命…は、常にコレージュ・ド・フランスで堅持されるひとつの伝統を早くも作り上げた。すなわち、人間は彼の教える学問よりも重要である、という原則がそれである。なぜなら、人間は生命であるが、これにたいして、学問はひとたび固定され限定されると、いとも簡単に形骸化してしまうからである。こうした柔軟性、この順応性こそ、探究者であり空想家であり、また固陋な枠組みを嫌う人文主義の精神そのものであった¹⁵。

コレージュ・ド・フランスにおける人文主義は、まず、教授の任命において現れる。教授の任命では、人物が学問よりも優先される。「人間は生命であるが、学問は形骸化してしまう」。この観点からみれば、コレージュ・ド・フランスが人文主義の精神を、20世紀におけるその歴史を通して堅持してきたことは明らかだろう。コレージュ・ド・フランスは、この世紀の端緒においてベルクソンを教授とし、また詩人ヴァレリーを詩学講座の創設とともに迎え入れ、そして「人間の死」を告げたフーコーを教授として選んできたのである。

第2節では、20世紀初頭に行われたベルクソンの講義を、いわばその内側から眺めてみることで、コレージュ・ド・フランスの講義が一般市民である聴講者たちを惹きつけてきた力を明らかにしようとした。それとともに浮かび上がってきたのは、このコレージュの伝統が、「生きた言葉」によって絶えることなく保持され形成されてきた過程である。「生きた言葉」とは、学者が自らの学説を、聴講者に対して目に見えるような仕方と説明することのみを意味するのではない。言葉が生きたものであったのは、学者が新たな問題に取り組み、自らの着想と考察を試す場として、コレージュ・ド・フランスの講義に臨んでいたからである。この点について、ここでもディルゼーの言を引くことで、その意義

を明確にしておきたい。すでに述べたように、19世紀、コレージュ・ド・フランスと自然史博物館は自然諸科学の発展に不朽の功績を刻んだ。それに対し、エコール・ノルマル、エコール・ポリテクニク、そして諸大学理学部は停滞し学問的貧困にあった。ディルセーは、これらの機関、学部では「自由な研究よりも教育そのものにたいする関心が優先させられていた」とし¹⁶、さらに、ドイツ大学の栄光と比して次のように述べている。

これら二つの貧困は同一の原因にその因を求めることができる。すなわち、自由な研究の目的と教育の目的とは別であるとする、時代遅れな高等教育観の支配がこれである。だが、コレージュ・ド・フランスや自然史博物館が創立され、これらに高い学問的水準が保証されたとき、真の意味における高等教育においてはこのような目的の相違がありえないことが理解されていた。すなわち、教授される学問の進歩に積極的に貢献することなくしては蘊蓄を傾けた授業はなされえず、また、学者が自らの研究成果を若い世代に伝達しえなければ、学者の大部分は孤立し麻痺状態に陥るということが¹⁷。

つまり、学者が研究活動の自由を享受し学問の刷新に力を注ぐことは、教育を目的とした彼の活動を妨げるものではなく、この二つの活動は不可分と見なされなければならない、ということである。「学問の進歩に貢献することなくして蘊蓄を傾けた授業はなされえない」。この観点からみれば、コレージュ・ド・フランスが、特異な形態ではありながらも高等教育機関として教育的意義を持ち続けてきたのは、そこにおいて学者が自由な研究を保証され、また独自の研究を発表するよう絶えず求められてきたからである。

コレージュ・ド・フランスの学者が語る言葉、聴講者が聴くその言葉は、例えば、本稿第2節で通りがかりに見たように、ベルクソンが生命という新たな問題と格闘しつつ講義を展開することによって、また例えば、本稿第1節末尾で見たように、フーコーがキリスト教的司牧制の分析という彼の権力批判の仕事を展開し、それを聴いた聴講者が彼らの現在の問題構成を理解することによって、生きたものとなっていた。こうした生きた言葉によって、コレージュ・ド・フランスの伝統は絶えず賦活され、保持されてきたのである。

注

- 1 本稿は、以下に記載する二つの論考にもとづいて、その内容を統合し新たに書き改めたものである。平光哲朗「コレージュ・ド・フランスの伝統的講義」、『文部科学教育通信第463号』所収、2019年、28～29頁。平光哲朗「コレージュ・ド・フランスにおけるベルクソンの講義」、『文部科学教育通信第464号』所収、2019年、22～23頁。
- 2 アントワース・コンパニオン教授の講義については、筆者の知人であり、同教授の指導を受けたブルースト研究者から聴き取った。
- 3 ステファン・ディルセー著、池端次郎訳『大学史：その起源から現代まで（上）（下）』東洋館出版社、1988年。以下、本稿第1節における19世紀までのコレージュ・ド・フランスの歴史に関する叙述は、ディルセーの著作から同コレージュにかかわる諸記述を抽出し、それらを筆者が再構成したものである。
- 4 大野一道『ミシュレ伝—1798—1874 自然と歴史への愛』藤原書店、1988年、270～272頁。
- 5 *Leçon sur les anesthésiques et sur l'asphyxie par M. Claude Bernard*, Paris, 1875, Cours de médecine du

Collège de France.

- 6 ドニ・ベルトレ著、松田浩則訳『ポール・ヴァレリー 1871-1945』法政大学出版局、2008年。
- 7 同、575頁。
- 8 ミシェル・フーコー著、高桑和巳訳『安全・領土・人口 コレージュ・ド・フランス講義 1977-1978年度』筑摩書房、2007年、3頁。
- 9 同、5頁。
- 10 アンリ・ベルクソン著、藤田尚志・平井靖史・岡嶋隆佑・木山裕登訳『時間観念の歴史 コレージュ・ド・フランス講義 1902-1903年度』書肆心水、2019年6月。本稿第2節における引用文はすべて同書からのものであり、文中（ ）内にその頁付けを記す。
- 11 ベルクソンは、一般的には、言葉というものを、実在である持続を空間化してしまうものとして、否定的に論じた哲学者として知られている。ここで「生きた言葉」と言うのは、まずはM.メルロ＝ポンティがベルクソンについてその言語批判を念頭に置きながら述べた一節を踏まえてのことである。メルロ＝ポンティは、ベルクソンが1900年にコレージュ・ド・フランス教授に就任したそのおよそ半世紀後、同じく教授に就任した。1953年1月に行われた就任記念講演において、彼はベルクソンを、その哲学の両義性を論じつつ讃えている。そこで彼は次のように述べている。「紙の上とか空間の中に固定されて非連続的ないくつかの要素となってしまう言葉が存在するとともに、思考の等価物でもあり、対抗物でもある生きた言葉も存在します。そのことはベルクソンも知っていたことなのです」(モーリス・メルロ＝ポンティ著、「哲学を讃えて」、木田元・滝浦静雄共訳『メルロ＝ポンティコレクション2 哲学者とその影』みすず書房、2001年、33頁)。
- 12 アンリ・ベルクソン著、杉山直樹訳『物質と記憶』講談社学術文庫、2019年、227～233頁。
- 13 「…ここで類似を取り出しているのは心理的な努力ではないのである。この類似は、客観的な仕方の一つの力のように作用し、いつも同じ反作用を引き起こす。そしてそれは、原因が深いところで同一なら続いて生じる総体的結果も同じになるという、まったく物理的な法則に従ってのことなのだ。大理石であれ、チョークであれ、炭酸カルシウムに対してなら、塩酸は常に同じように作用するというを理由にして、酸は異なる種のあいだで一つの類を特徴づける性質を見分けている、と言う人はいないだろう。ところで、この酸が塩からその塩基を取り出す働きと、植物がこの上なく異なる土壌から、自分の栄養分にできるはずの同じ諸元素を変わることなく抽出する作用とのあいだに、本質的な差異はない」(同、231頁)。
- 14 第3講は1902年12月19日に行われた。
- 15 デイルセー、前掲、415～416頁。
- 16 同、427頁。
- 17 同、430頁。

参考文献

- ステファン・デイルセー著、池端次郎訳『大学史：その起源から現代まで(上)(下)』東洋館出版社、1988年。
- J. B. ピオベッタ著、中山毅・諸田和治訳『フランスの大学 ―その制度と運営―』白水社文庫クセジュ、1963年。
- 島田雄二郎『ヨーロッパの大学』玉川大学出版局、1990年。
- C. H. ハスキングズ著、青木端三・三浦常司訳『大学の起源』八坂書房、2009年。